

平成21年6月25日

梅雨らしい日が続いていますが、明るく楽しく元気に行きましょう。お仕事ご苦労様です。

8月5日がタクシーの日は、知っている方も多いかと思いますが、タクシーの起源を勉強する機会がありましたのでご紹介します。

タクシーの祖先

そもそもタクシーの元祖は、パリの辻駕籠らしいです。

1617年（徳川秀忠の時代）に、室内が腰掛式の背の高い箱の両側面にそれぞれ長い柄を取り付けて、前後を駕籠かきが、人力車の柄を持つように走らせたのが世界最初のタクシーらしい乗り物のようです。

1623年には、2頭引きの4輪車で、客2人、御者は左側の馬の背に乗った、フィアクルと呼ばれる馬車が免許になったそうです。この頃、既に免許制だったのですね。

1632年にはロンドンでも、辻駕籠と辻馬車が同時に免許になっています。

乗合馬車の発生

ところが両都市とも、運賃が高く、御者がお客様の足元を見るような言動が目立ち、金持ちすら、できれば乗りたくない乗り物になっていったのだそうです。その声に応えるように、フランス人の数学者であり哲学者であるパスカルが、世界で初めての乗合馬車をパリに走らせました。パスカルという人、他のことで歴史上の人物かと思いきや、こんなところでも活躍している人でした。

1662年この乗合馬車は、開業しました。当時、4人乗りの辻馬車が1人40～50スウという運賃を取っていたのに対し、8人乗りのこの乗合馬車は、1人5スウ均一という運賃で人気を呼び、路線をどんどん増していきながら、乗り残しが出るような盛況ぶりだったそうで

す。

しかし当時のルイ王朝政府は、社内暴力の発生を防止するために、労働者階級の利用禁止令を出していました。それでなくとも、上流階級には安い5スウでも、労働者階級には高く、利用しづらい金額であったそうです。そこで、民衆と彼らに便乗した辻馬車の御者達が一緒になって、この乗合馬車に石を投げつける事件を繰り返したそうです。次第に上流階級にも嫌気がさしてきて乗らなくなり、5スウの乗合馬車は、1675年には完全消滅したそうです。

ハンサム・キャブ

ロンドンの方は、乗合馬車はなく、その後はパリもロンドンも辻馬車全盛の時代が続いたそうです。だが、この「フィアクル」（英語発音だとハクニー）は、車重があって、2頭の馬で引かなければならなかったし、スピードも出せなかったのですが、新しい辻馬車用の車両はなかなか出てこなかったそうです。

1800年頃になって、「カブリオレ」（英語発音でキャブリオレイ）と呼ばれる、1頭立ての2輪車で、安全にスピードが出せる、軽量の車両が開発され、御者も馬にまたがるのではなく、車両の方に乗るようになったそうです。

1839年には、イギリス人の建築家J・Aハンサムが、四角いフレームの上に2人掛けの椅子を2列向き合わせて、御者席を客席の前に置いた、「ハンサムキャブ」（キャブは、キャブオレイの略）を完成させます。この馬車は、長い間ロンドンのシンボルとなり、1890年には、ニューヨークの街を走るようになっていました。

新案距離表示装置

1940年代に入ると、新しい4輪の馬車も登場してきました。人々は、文字通り4輪キャブと呼んだり、ゴロゴロと大きな音を立てて走るのので、その擬声音からグロウラーキャブと呼んでいました。キャブリオレイやハンサムキャブと同じように、1頭立て、御者は客席の前、違いは、屋根に大きな荷物を載せられるよう改

良されていました。この頃は産業革命により、ヨーロッパ各地は、鉄道の時代に入っており、この馬車は、駅からホテルや自宅までの重要な公共交通機関として世界に広まっていくことになります。

私達が皇室神事等で、ときどき目にする馬車は、この頃の物のようです。

ところで、ハンサムキャブやグロウラーキャブが生まれてくる頃の1847年には、「新案距離表示装置」という機会が發明されています。

産業革命があつて、先にも述べた辻馬車の御者による、雲助的な運賃の取り方に社会が黙っていられなくなったという背景があつたようです。

客室の壁に時計の文字盤のような装置を取り付け、後輪の回転数を歯車で針に伝える装置だったそうです。この發明が、走行距離で運賃を決定させる考え方の基になっています。

タクシーの語源

1891年、ドイツ・ハンブルクに住む、W・ブルーンが、料金メーターを發明しました。新案距離表示装置の發明から半世紀近くたって、辻馬車の御者のあこぎな運賃の吹っかけ収受は相変わらずの社会問題であつたそうです。

そこで、ブルーンは、馬車の車軸の回転で動く装置を作り、それによって、時間距離併用で運賃を算出するメーターを完成させました。彼は、このメーターに「タクサ・メーター」（英語発音でタクシー・ミーター）という商品名を付けました。計るメーターという意味です。

あつという間に、これが世界中の辻馬車に取り付けられるようになっていったそうです。

そして、このメーターこそが、タクシーの語源になったのです。タクシーに取り付けられたメーターだから、タクシーメーターなのではなく、このメーターを取り付けた辻馬車を、タクシー・ミータード・キャブと呼ぶようになり、それが簡略化されてタクシーキャブ、あるいはタクシーと呼ばれるようになったのだそうです。

日本のタクシーの草分け

1912年8月5日、東京・有楽町の数寄屋橋のたもとで日本初のタクシー会社が開業しました。

その会社は、タクシー自働車株式会社といいます。「自動車」でなく「働」という字を使って、市民に対して「辻待ち自働車」と言って宣伝していたようです。日本語の言霊を知ると、解るような気がします。

営業は、6台のT型フォードを使用し、W・ブレンが發明した運賃メーターを取り付けていました。

開業当時の運賃は、最初の半マイル（約800メートル）が60銭、約500メートル毎に10銭、待ち料金は、5分毎に10銭であつたそうです。当時、もりそばが、3銭ぐらいの物価水準だそうです。